

經典餘師
中庸全
十

11
1029
10



中庸章句序

中庸ハ何の爲に
而して作る子思子

道學之其傳と失
をん^うと憂て作れ

神天に繼ぐ極と聖

立た自よ而りて道
統と之の傳でん自よて來きる

有也矣

持六章之書以歸之於

其經不見へとも、
 其旨允に厥中を
 執者堯之舜に授
 所也

經典徐師

中庸章句序

中庸や八木の書の名より章句
序のといふ前出たり

中庸何爲而作也子思子憂道學之

失其傳而作也

中庸の書、何れ爲に作爲せし
となし、世の中未だいづるを

聖人のうちその相傳とてを失ふ人うと
あらず憂ひぬひて作為したまふを
益白

上古聖神繼天立極而道統之傳有

自來矣

神明聖德乃天子世に出たまふ天下万民

と治る天帝の継嗣て太平の極を立とすむその
道統の傳授今に自來あると知りとせ

其見於經則允執厥中者堯之所以

授舜也

天下と治め國家万民と仁愛の心を
召つけし中としりし中とし東西南北遠

近の形なりまゝハ高たかき卑ひき貴き賤けんの異ちがうハ人ひと々々也却しか
てそのへまゝか紀きがとく一いち班はん小平せうへいう小優せうゆう劣りやく厚こうき薄はくき

中書

人心惟危，道心惟微，惟精惟一，執中而授之以政，罔有愆，所由也。

堯之一言至多^{タリ}盡^ス

ちりさん而舜復之益
 小三言を以てする
 者ハ則夫堯之一言
 必也是の如くふ
 て而して後は無幾
 す可とを明を所以
 也（矣）

蓋嘗小之と論す
一而已而して人
心道心之異有と爲
者、眼多其或、形
氣之私、生ト或ハ
性命之正きに原
と爲す所の者同
と爲す所の者同
始て安う不或
微妙して見難耳

經典餘師

乃差^{ちが}別^べなく公道^{こうど}ふあるべしとたゞ日月乃
 くらゐの清^{きよ}き濁^{にご}きくらひなく照^てしたまふ如^{ごと}く
 その偏^{へん}倚^いあるを中^{ちゆう}に名^なづめり上^うに立^たて
 君^{きみ}ハ公^{こう}のちを執^{しつ}守^{しゆ}るといふと經^{きやう}書^{しよ}よりたゞこれ
 世^よの其^{その}もとめ堯^{ぎやう}帝^{てい}舜^{しん}帝^{てい}へ大宝^{たいほう}を
 やづりぬと此^{こゝ}傳^{でん}授^{じゆ}の御^ご詞^しなり

人心性

危道心惟微惟精惟一允執厥中者

と終る酒色財宝におぼる心いづるといふ道に
君ハ君まゐるべく父ハ父たるべく臣ハ忠義子ハ孝養

おのゝく^いと履^いべき^いう^いあり^い夫^いと道^い心^いと^いい^いあり^い
 兎^い角^いふ^い人^い心^いま^いハ^い引^いさ^いと^いす^いと^い危^いき^いゆ^いの^いり^い道^い心^いを^い
 か^いく^いれ^いを^いと^い微^いさ^いう^い何^いと^いぞ^いあ^いら^いと^い物^いふ^い
 う^いを^いつ^いと^いぞ^い雜^いな^いと^い措^い一^いと^いの^い一^いと^いい^いふ^いと^いま^いき^い
 ま^いり^い一^いな^いち^いが^いと^いに^い精^いく^い清^いき^いま^いり^い精^い一^いふ^いし^いて^いふ^い
 ま^いり^いと^い中^いと^い執^いま^いり^いと^いい^いふ^いあ^いれ^い舜^い帝^いより^い禹^い王^い
 へ^い天^い子^いの^い位^いと^いも^いば^いう^い
 ゐ^いと^いれ^い乃^い傳^い授^いけ^いり^い
 堯^い之^い一^い言^い至^い矣^い盡^い

矣而舜復益之以三言者則所以明夫堯之一言必如是而後可庶幾也

中と執の一言堯帝ふ始めて元より天下と治るの道
至極盡したまふとあり而るに舜帝も人心道心精
一の三言と添まゝゆへに如是ふ工夫せば堯帝の一
言と明らふ自得をもに庶幾べしとあり

蓋嘗論之心之虛靈知覺一而已矣
而以為有人心道心之異者則以其
或生於形氣之私或原於性命之正
而所以為知覺者不同是以或危殆
而不安或微妙而難見耳

朱子嘗試小

人の心本より静るるも、たゞの虚くして、靈らなり。たゞの
智あるも、愚るるも、可否と知り、まじき寒暖と覺へるハ

卷之四

一

(英)

然も人是有不
 莫故上智と
 雖人心無之能
 亦是性有不
 故下愚と雖
 道心無之能

二の者方寸之間
 雜之而之と
 治之所以と知
 不則危き者
 愈微く微き者
 愈微く天理の公
 卒小勝て夫人欲の
 私小勝て無

精之則夫乃
 二の者之同と察
 て而之雜也
 守て其本心之正
 斯小従之
 間斷無れ必す道
 心と使常一身乃
 主として爲て
 人心毎小命と聽
 使則危き者
 安く微き者
 り而之動靜云爲
 自過不及之差無
 (英)

經典餘而

一よりなり而る人心道心と異のありといふ善惡の
 形が交りて氣質のそまる所より人心の私意をびこ
 るゆへ又天性自然の心と傷け付て命の正き
 と守るゆへ道心のたゞき原本ふくむるなり此
 危殆ありの知覚あるより或ひは人心長くと
 危殆ありの道心かく微妙なりて見えず

然人莫不有是形故雖上智不
 能無人心亦莫不有是性故雖下愚
 不能無道心

二者雜於方寸之間而不知
 所以治之則危者愈危微者愈微而

天理之公卒無以勝夫人欲之私矣

その道心人心と胸中方寸をうりの間小育養
 天理の公理つらふくうて人欲の
 私意と勝てなむとて微妙なりといふなり

二者之間而不雜也一則守其本心
 之正而不離也從事於斯無少間斷

必使道心常爲一身之主而人心每
 聽命焉則危者安微者著而動靜云

爲自無過不及之差矣

混雜二の者ふつりて一圖本心の正と
 守りて離るるや斯に従事して少の
 間斷なき
 止まりべし道心の本理抑ゆるなり

中庸

三

道心主君て人心の臣下の如く道心の命令次第
とるなりさるなり初め危なりうなり安穩なり微なり
著なりて動靜なり云なり為なりいなりんなりと中なりふ叶なりひて過なりるなり
不及なりしむその差偏倚なりなりなり

夫堯舜禹天下の大聖也天下の大聖にして天下の大事を行ふ天下の大事を授受之際丁寧告戒なり不過如此則天下之理豈有以加於此哉なり

夫堯舜禹天下之大聖也以天下相傳天下之大事也以天下之大聖行天下之大事而其授受之際丁寧告戒不過如此則天下之理豈有以加於此哉なり

是自以來聖聖相承成湯文武之君なり為なり皋陶伊傳周召之臣なり為なり若なり既なり

是以來聖聖相承若成湯文武之為なり至極の道理なりとなり此なり加なりとなり自なり

皆此を以て夫道統の傳と接なり

君皋陶伊傳周召之為臣既皆以此而接夫道統之傳なり

湯王なり一湯王より文王武王へさづりなりさるなり君のなり

若吾夫子則雖不なり得其位而所以繼往聖開來學其功なり

反有賢於堯舜者然當是時見而知なり

之者惟顏氏曾氏之傳得其宗及曾氏之再傳而復得夫子之孫子思則去聖遠而異端起矣子思懼夫愈久なり

吾夫子の若きなり其位と得なり不なり雖なり其功と開なり來學なり其功と反なり堯舜なり是時と當なりて見なりるなり而なり之なりと知なりるなり者なり惟なり顏氏曾氏なり之傳なり其宗と得なりるなり及なり曾氏なり之再傳なり而復得夫子なり之孫子思則去聖遠而異端起矣子思懼夫愈久なり

の若く明りて且
盡る者ハ有未也

是自又再傳

是書と推明

承て先聖之統

没るに及て遂

其傳と失ふ則

吾道之寄す

所言語文字之

異端之説日新

焉乎

至て老佛之徒出

近て則ち大い真

を乱る

然ども尚幸い小

書之混不故程夫

子兄弟の者出

考る所有て

夫乃千載傳ら

不之緒と續

得據る所有て

之非と斥て

蓋子思之功是

小畧一ぬまゝの千年の世とへがたぬれども言乃
 不異と符節の如く歴前代の書と選考る小あの
 書の理と明りて明りて明りて明りて明りて
 誠と聖人の道乃綱維と提挈てその教の蘊奥と
 開示たしむるも
 自是而又再傳以得孟
 氏為能推明是書以承先聖之統及
 其没而遂失其傳焉則吾道之所寄
 不越乎言語文字之間而異端之説
 日新月盛
 子思の再傳して孟子出かり
 聖人の道統を承つて孟子世
 道を懐きたる人るく口みて言語と文字の中ふ
 見ふ不越けり異端外道の
 説ハ日月盛なり
 以至於老佛之
 徒出則彌近理而大亂真矣
 中ふ
 老子乃
 道教釈迦の仏法あつたその説
 小近きやうな大いふ真実と乱る
 然而尚幸此書之不泯故程夫子兄
 弟者出得有所考以續夫千載不傳
 之緒得有所據以斥夫二家似是之
 非
 まう小の中庸乃書混びうやとてその
 上へ小程先生兄弟出たう千載もたて
 傳つたさう緒と續てうの老子仏法二つの流義
 とあやどけ是非と斥て示しめり
 蓋子思之功於是為大而微程夫子
 則亦莫能因其語而得其心也惜乎
 其所以為説者不傳
 功績大ひうりあうれ
 とも又程先王の兩賢人微りやうの道理と語
 たすへ人あらざりて心不悟得とあうた惜乎

而輯錄凡石氏之所僅
其門人之記
大義雖明而微言未
析未其門人自
至則其煩
其師說小倍而
者亦之有於矣

熹蚤歲自即嘗
受讀竊疑之
亦年有一旦恍然

其要領者然後乃敢會眾說而折其
衷既為定著章句一篇以俟後之君
子

而一二同志復
石氏書刪其繁
輯略且記所嘗
論辯取舍之意
以附其後不附

而凡石氏之

所輯錄僅出於其門人之所記是以

大義雖明而微言未析至其門人所

自為說則雖頗詳盡而多所發明然

倍其師說而淫於老佛者亦有之矣

程子之中庸と說たましとしてる學者の輯錄
たりがある程子の門人の手に出たるはまづつたり

なり大義ハ明らう述てあらとも意をあめ微言
の大切ハつ折るとしてる門人の説も頗い

すて小詳書るれどもその發明師の意に倍くとしてる
ありて決句を老に小淫しとしてるまづとしてる

熹自蚤歲即嘗受讀而竊疑之沈潛

反復蓋亦有年一旦恍然似有以得

其要領者然後乃敢會眾說而折其

衷既為定著章句一篇以俟後之君

子

熹ハ朱子の名をりてるのくしとしてる五
一蚤歳のありてるの讀みをしてる竊私にそのととしてる

考へりとしてる一旦恍然としてるのとしてるる
要領の極意を得てるのとしてる衆の説としてるのとしてる

會かんてるのとしてる表正と折てるのとしてる章句の一篇を
得てるのとしてるとしてる吾愚なれば後に君子の
評論としてるのとしてるとしてるとしてる

而一二同志復取石氏書刪其繁亂

名以輯略且記所嘗論辯取舍之意

別為或問以附其後然此書之旨
支分節解脈絡貫通詳略相因巨細

然^{しか}後^{のち}此^{この}書^{しよ}之^の旨^{しめ}
支^し分^{ぶん}節^{せつ}解^{かい}脈^{みやく}絡^{らく}
貫^{くわん}通^{つう}詳^{しやう}畧^{りやく}相^{さう}因^{いん}
巨^こ細^こ畢^ひく舉^あ

而して凡そ諸説之
同異得失亦以て曲
不暢旁く通ト
各其趣を極むと
と得

道統どうとう之傳のでん不ふ於お初はつ不ふ取と之の士し或ある然しかも取と之の士し雖いえ取と之の士し學がく

有ハ則亦遠キ小
行高キ小升之
一助小庶
爾云（壽）

序す
淳熙己酉春三月
戊申新安の朱熹

畢舉

記録きらくと取とききくくてて義理ぎりと辯論べんろん一二人ひとりふたりと石氏いししの

合てその繁煩と刪り正しと取
 雑するとまづ一篇と編る書の名と輯略と
 名づけて別不疑論と問答して中庸
 或問と題号して附る此乃書

のちうへもあきらふなり支々節々分解て
 絡貫通今すでハ詳きと畧とありしも一
 不相因て巨細畢挙てむぐ免る
 しめいしとりふものなりん

而凡諸說之同異得失亦得以曲暢
旁通而各極其趣

同ト異ナルと旁に通徹て委曲ふ
その趣旨と暢極めおくとうり
雖於

道統之傳不敢妄議。然初學之士或有取焉。則亦庶乎行遠升高之一助。

云爾云フ
元もとより
なまじり
敢あはて妄みだり不議論ふぎろん
至いたるに重おもきことあら

取るなり 志るもど 初学はつがくの人々 志の意に於て
 取りらひ 力の次第しだい 上達じやうたつの場 至るべし
 たとへば 遠きふ 行ゆハ 近きより 高きふ 升のぼらば
 車くるまも 遠くも びき 助け なるんとぞ ○朱子の字

を效さんとするハ精義或問輯畧全書語類等を
見をてて分明なりとて近来ハとく宋學を
と浅近なる謬誤なりとあり人々多し學問を深
く學びざる謬誤なりとて近来仁齋二氏の如きハ又

まゝ一家の豪傑としてあれは又その所見ありと
する但し博識文章のとして儒見の陋は免ぐ
置きそのなりと或先生のつひ

中庸朱熹章句

卷之四 西泰三月九日申時安未熹

中庸

朱熹章句

中庸朱熹章句
子程子曰偏者
不之中謂易
不之中謂庸
天下之正道
天下之定理
此篇乃
孔門傳授
心法
子思其久
差人故
以孟子授

其書始一理
中散萬事
為末復合
一理為之故

經典

中庸

子程子曰不偏之謂中不易之謂
庸中者天下之正道庸者天下之
定理此篇乃孔門傳授心法子思
恐其久而差也故筆之於書以授
孟子
中庸二字第一義多偏中易
心乃法方若口傳之差不易之謂
子思子孟子
其書始言一理中散
為萬事末復合為一理放之則彌

てハ則チ六合一彌
り之と卷ハ則チ退
ひて密に藏る其味
窮り無^き皆實學
也善讀者玩索^{する}
て得^ると有^るハ則チ終身
之を用て盡^すと
能ハ不者有^る於焉

天の命之を性と謂
 性ひ率之を道と
 謂道を脩むる之を
 教と謂

道ハ須臾も離る可
不離る可ハ道不非
是故小君子ハ其
睹不所を戒慎其
聞不所を恐懼を

隱^{カクレ}也^{ナリ}なる^{ナリ}より見^ミゆ^{カサ}
ハ莫^{ナシ}微^{ホソ}き^{ナリ}より顯^{ハシ}
々^{ナリ}あり^{ナリ}莫^{ナシ}故^{ナリ}火^ヒより君^{ミコ}
子^コハ其^{ソノ}獨^{カミ}を慎^{ツツシム}む

六合卷之則退藏於密其味無窮
皆實學也善讀者玩索而有得焉
則終身用之有不能盡者矣

此書の理と云ふものは一よりある説を中
ろく徳の万変不行 弥るこゝに説未ハ又天地人一理ある
ことと説しあり 誠や聖人の道ち 放ちてハ六合充つこと
里小く巻をさむと云ふ細密なる中み藏るゝと云ふと真実
の学問ふて窮まり多々味をひて玩索めくありふ
得ハ終身用盡されぬゆゑと云ふなりと

天命之謂性率性之謂道脩道之謂教

自然の理ありたゞハ草木ありてハ四季の時節至りて花
きた雨露を得てあたらしく生長をまゐると人ありて仁義礼智
といふもの備りて自然に生長をまゐる理ありて性を性と
いふもの叔人ハ自然にその性は率ゑるものなり其名を道といふ

たゞ性ハ人の往來を定さぬ水の流るべき所の如く自然とある者なりをて人水へるが如く人の歩く往來を定むるは道道とて人水のちを川といふも同じとてなり性は率て人を道とて人は是なりゆり水は高き所へるが如く人の溝壑田地を分ちて歩むは道とて人のちを然る人ハ心とて物不動ひて變て易まりのありをて人ハ差やをを差ざるやうふちびくと道を脩むるとて人ハ家脩養の脩の字のちなり

その道を脩むるの法よき哉（教といふる）
道也者不可須臾離也可離非道也
是故君子戒慎乎其所不睹恐懼乎
其所不聞（誠不教の道に人須臾も離るべくば行ハモ
も構ひるゝ離とらるゝ者多し道といふ者不

ありて徳有の君子ハ人の睹聞ぬ所を懼れ慎む
 こと大切なり是中庸身の行ひを正くするより
 莫顯乎微故君子慎其獨也
 莫見乎隱

見ハ世ヲ死ハ莫ク微のより顯ハ世ヲ死ハ自
然の理よりの故ハ君子ハ暗聞ヘざる處の獨の行ひと慎つ望きト云

喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉也馬

右第一章子思傳所之意を述べて以て言を立首る道之本原天不出而一易可なり不其實體ハ已不

備り而て離る可く不を明る次有存養省察之要を言終に聖神功化の極を言蓋し學者此に於て及く諸を身み求而て之を自得し以夫外誘之私を去て而て其本然之善を充んと欲を揚氏の所謂一篇之體要とい是也其下十章ハ蓋し子思夫子之言を引

喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉

右第一章子思述所傳之意以立言首明道之本原出於天而不可

易其實體備於己而不可離次言存養省察之要終言聖神功化之極蓋欲學者於此反求諸身而自得之以去夫外誘之私而充其本然之善揚氏所謂一篇之體要是也其下十章蓋子思引夫子之言以終此章之義

經典餘師

中庸

三

終典餘師
以て此章之義を

仲尼の曰く君子は中庸をと小人は中庸をと反とを

君子之中庸は君子の時に時小中を小人之中庸は小人の時に時小中を小人の時に時小中を小人の時に時小中を

右第三章

子曰く中庸は其に至る乎民能とと鮮とと久とと一とと矣

右第三章

子曰く道之行はれ不我之を知知者ハ之は過愚者ハ及バ不道之明とと我之を知賢者ハ之は過不肖者ハ及バ不矣

人飲食せ不とと莫能味ととひを知と鮮とと

右第四章

終典餘師

充とと此篇ハ揚氏の謂とと本體の肝要あり以下皆夫子の言を引く此首章の義理をあら終とと

仲尼曰君子中庸小人反中庸

君子と小人の上は立位ある方先は徳ある人あり小人とハ下賤の人々先は不徳の者あり中庸の道と周とと

君子之中庸也君子而時中小人之反中庸也小人而無忌憚也

中庸の道と人者ハ定まる体あり者あり平常日用の理は偏倚多き節は適ふのをいふ時は中と人事は臨で理は中より是君子の徳あり小人ハ已ら心は隨て戒り守とと忌憚あり故は常は中庸と反あり

右第二章

子曰中庸其至矣乎民鮮能久矣

中庸ハ人の行の至極と世の教へねとあり

右第三章

子曰道之不行也我知之矣知者過之愚者不及也道之不明也我知之矣賢者過之不肖者不及也

人莫不飲食也鮮能知味也

中庸の理知得やう者有る心を止めざる故は過ると不及との弊あり人皆飲食せざる者あり然れども心のちりたる時ハ味ハ知らざるのみと

右第四章

中庸

子曰道其不行矣夫

右第五章

子曰舜其大知也與舜問而好察乎微好惡之察而用其端而執其中民

右第六章

子曰人皆曰予知驅而納諸

右第七章

子曰回之爲人也擇乎中庸得一善而服膺之弗失矣

右第八章

子曰天下國家可均也爵祿可辭也

子曰道其不行矣夫

右第五章

子曰舜其大知也與舜好問而好察乎微好惡之察而用其端而執其中民

右第六章

子曰人皆曰予知驅而納諸

阱之中而莫之知辟也人皆曰予知擇乎中庸而不能期月守也

右第七章

子曰回之爲人也擇乎中庸得一善而服膺之弗失之矣

右第八章

子曰天下國家可均也爵祿可辭也

白刃可蹈也中庸不可能也

右第九章

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而之強與

右第九章

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而之強與

強與抑而之強與

無道南方之強也君子居之社金革

死而不厭北方之強也而強者居之

故君子和不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變塞焉強哉矯

國無道至死不變強哉矯

右第十章

右第十章

故君子和不流強哉矯中立而不倚強哉矯國有道不變塞焉強哉矯

子曰（一）曰（二）曰（三）曰（四）曰（五）曰（六）曰（七）曰（八）曰（九）曰（十）曰（十一）曰（十二）曰（十三）曰（十四）曰（十五）曰（十六）曰（十七）曰（十八）曰（十九）曰（二十）曰（二十一）曰（二十二）曰（二十三）曰（二十四）曰（二十五）曰（二十六）曰（二十七）曰（二十八）曰（二十九）曰（三十）曰（三十一）曰（三十二）曰（三十三）曰（三十四）曰（三十五）曰（三十六）曰（三十七）曰（三十八）曰（三十九）曰（四十）曰（四十一）曰（四十二）曰（四十三）曰（四十四）曰（四十五）曰（四十六）曰（四十七）曰（四十八）曰（四十九）曰（五十）曰（五十一）曰（五十二）曰（五十三）曰（五十四）曰（五十五）曰（五十六）曰（五十七）曰（五十八）曰（五十九）曰（六十）曰（六十一）曰（六十二）曰（六十三）曰（六十四）曰（六十五）曰（六十六）曰（六十七）曰（六十八）曰（六十九）曰（七十）曰（七十一）曰（七十二）曰（七十三）曰（七十四）曰（七十五）曰（七十六）曰（七十七）曰（七十八）曰（七十九）曰（八十）曰（八十一）曰（八十二）曰（八十三）曰（八十四）曰（八十五）曰（八十六）曰（八十七）曰（八十八）曰（八十九）曰（九十）曰（九十一）曰（九十二）曰（九十三）曰（九十四）曰（九十五）曰（九十六）曰（九十七）曰（九十八）曰（九十九）曰（一百）

子曰（一）曰（二）曰（三）曰（四）曰（五）曰（六）曰（七）曰（八）曰（九）曰（十）曰（十一）曰（十二）曰（十三）曰（十四）曰（十五）曰（十六）曰（十七）曰（十八）曰（十九）曰（二十）曰（二十一）曰（二十二）曰（二十三）曰（二十四）曰（二十五）曰（二十六）曰（二十七）曰（二十八）曰（二十九）曰（三十）曰（三十一）曰（三十二）曰（三十三）曰（三十四）曰（三十五）曰（三十六）曰（三十七）曰（三十八）曰（三十九）曰（四十）曰（四十一）曰（四十二）曰（四十三）曰（四十四）曰（四十五）曰（四十六）曰（四十七）曰（四十八）曰（四十九）曰（五十）曰（五十一）曰（五十二）曰（五十三）曰（五十四）曰（五十五）曰（五十六）曰（五十七）曰（五十八）曰（五十九）曰（六十）曰（六十一）曰（六十二）曰（六十三）曰（六十四）曰（六十五）曰（六十六）曰（六十七）曰（六十八）曰（六十九）曰（七十）曰（七十一）曰（七十二）曰（七十三）曰（七十四）曰（七十五）曰（七十六）曰（七十七）曰（七十八）曰（七十九）曰（八十）曰（八十一）曰（八十二）曰（八十三）曰（八十四）曰（八十五）曰（八十六）曰（八十七）曰（八十八）曰（八十九）曰（九十）曰（九十一）曰（九十二）曰（九十三）曰（九十四）曰（九十五）曰（九十六）曰（九十七）曰（九十八）曰（九十九）曰（一百）

子曰（一）曰（二）曰（三）曰（四）曰（五）曰（六）曰（七）曰（八）曰（九）曰（十）曰（十一）曰（十二）曰（十三）曰（十四）曰（十五）曰（十六）曰（十七）曰（十八）曰（十九）曰（二十）曰（二十一）曰（二十二）曰（二十三）曰（二十四）曰（二十五）曰（二十六）曰（二十七）曰（二十八）曰（二十九）曰（三十）曰（三十一）曰（三十二）曰（三十三）曰（三十四）曰（三十五）曰（三十六）曰（三十七）曰（三十八）曰（三十九）曰（四十）曰（四十一）曰（四十二）曰（四十三）曰（四十四）曰（四十五）曰（四十六）曰（四十七）曰（四十八）曰（四十九）曰（五十）曰（五十一）曰（五十二）曰（五十三）曰（五十四）曰（五十五）曰（五十六）曰（五十七）曰（五十八）曰（五十九）曰（六十）曰（六十一）曰（六十二）曰（六十三）曰（六十四）曰（六十五）曰（六十六）曰（六十七）曰（六十八）曰（六十九）曰（七十）曰（七十一）曰（七十二）曰（七十三）曰（七十四）曰（七十五）曰（七十六）曰（七十七）曰（七十八）曰（七十九）曰（八十）曰（八十一）曰（八十二）曰（八十三）曰（八十四）曰（八十五）曰（八十六）曰（八十七）曰（八十八）曰（八十九）曰（九十）曰（九十一）曰（九十二）曰（九十三）曰（九十四）曰（九十五）曰（九十六）曰（九十七）曰（九十八）曰（九十九）曰（一百）

右第十一章

子曰（一）曰（二）曰（三）曰（四）曰（五）曰（六）曰（七）曰（八）曰（九）曰（十）曰（十一）曰（十二）曰（十三）曰（十四）曰（十五）曰（十六）曰（十七）曰（十八）曰（十九）曰（二十）曰（二十一）曰（二十二）曰（二十三）曰（二十四）曰（二十五）曰（二十六）曰（二十七）曰（二十八）曰（二十九）曰（三十）曰（三十一）曰（三十二）曰（三十三）曰（三十四）曰（三十五）曰（三十六）曰（三十七）曰（三十八）曰（三十九）曰（四十）曰（四十一）曰（四十二）曰（四十三）曰（四十四）曰（四十五）曰（四十六）曰（四十七）曰（四十八）曰（四十九）曰（五十）曰（五十一）曰（五十二）曰（五十三）曰（五十四）曰（五十五）曰（五十六）曰（五十七）曰（五十八）曰（五十九）曰（六十）曰（六十一）曰（六十二）曰（六十三）曰（六十四）曰（六十五）曰（六十六）曰（六十七）曰（六十八）曰（六十九）曰（七十）曰（七十一）曰（七十二）曰（七十三）曰（七十四）曰（七十五）曰（七十六）曰（七十七）曰（七十八）曰（七十九）曰（八十）曰（八十一）曰（八十二）曰（八十三）曰（八十四）曰（八十五）曰（八十六）曰（八十七）曰（八十八）曰（八十九）曰（九十）曰（九十一）曰（九十二）曰（九十三）曰（九十四）曰（九十五）曰（九十六）曰（九十七）曰（九十八）曰（九十九）曰（一百）

子曰素隱行怪後世有述焉吾弗爲

之矣（一）聖人（二）世の人の爲（三）小未來を察（四）今の天下（五）社を

君子（一）道（二）中庸（三）義（四）不義（五）を擇（六）中庸（七）を行（八）力盡（九）半途（十）

唯聖者能之（一）右理を隱（二）怪（三）行（四）名を舉（五）を好（六）まざる者（七）中庸（八）を尊（九）と行（十）也

君子依乎中庸（一）遯世不見知而不悔（二）

右第十一章

君子之道費而隱（一）天地万物の理（二）費（三）廣（四）て隱（五）

夫婦之愚可以（一）知焉（二）夫婦之不肖可以（三）能行焉（四）及其

至也（一）雖聖人亦有所不能焉（二）天地之

大也（一）人猶有所憾（二）故君子語大天下

莫能載焉（一）語小天下莫能破焉（二）

誠（一）道（二）費（三）隱（四）聖人（五）盡（六）極（七）也（八）今日相應（九）道を行（十）交

聖人（一）と人（二）ととも盡（三）知る（四）一（五）不肖（六）の行（七）入（八）由（九）至

極（一）の場（二）あり（三）大知（四）のの（五）能（六）所（七）あり（八）假令（九）天地

の恵（一）とふ（二）万民（三）のた（四）あり（五）父母（六）あり（七）然（八）ととも（九）尚下

詩し ハ云いくハ鳥と飛とて天てん
 小こ魚うり魚い淵うみ躍あどる
 言いふハふハ其その上う下う
 察さらハ也なり
 (子)

君子之道端を夫婦
 小造其至る小及ん
 天地小察らるる
 り乎

右第十二章子思とくしうしゆ言ことば蓋おほ以もつ首章おほもと道みち離はな可べうら不ずの意い
を申明しんめいを其下そのしたハ
章孔子之言しやうこうしのここのことばを雜まじ

子曰く道ハ人ハ遠
く人ハ人之道を爲
て而して人ハ遠ざ
かるハ以て道と爲
可なり不

詩云く柯を伐柯
を伐其則遠く不
柯を執て以て柯を
伐睨て之を視猶
以て遠くと爲故が
ゆへみ君子人を以て
人を治む政たりと
而して止む
忠恕道を違て遠く

民は恨をらるゝにありまこと必理の盡くありと費く隱
ありまのゆへは君子の道その大なるを語るべ天下の内は
載置とてありてなごころ又小なるありて針
のさたふく突破る事もあるぬとんとぞ 詩云。

此詩ハ意のふきみありて景色をのびたるまであらうとふ
引くかり用ひてまんせのなたる天より高きものあり
淵より深きものなり
魚躍てその深きに入りみありて天
地の間道みありざるはし
祭のありとわくのどし

君子之道造端乎天

婦及其至也。察乎天地。夫夫婦婦の如くあるの道より端を

雜引孔子之言以明之
 右ハ子思首の章の意を申あつたを攝此下ある聖人の言を
 もつて引て明ふを給ふ

子曰道不遠人人之爲道而遠人不

常み人の身を離るゝことあるべし人の常み行ふとある

詩云伐柯伐柯其則不遠執

柯^カ以^レ伐^ス柯^カ。睨^ニ而^{シテ}視^ス之^ヲ。猶^モ以^テ爲^ス遠^ニ。故^ニ君^ノ
 子^ハ以^テ人^ヲ治^ム人^ヲ。改^メ而^{シテ}止^ム。
此詩の意ハ人あて人の道を
行ふかごころねといへるふ
 たりともあり。柯^カハ斧^ノの柄^ノあり。柄^ノを拵^ムゆるみ斧^ノをのちて木^ノは
 たりたりと木^ノを伐^スる然^レも斧^ノ少しも違^ハひ有^ラず。是^レみ形^ノち離^レれ
 ある故^ニ。み目^ヲを睨^ミみ^テ視^スるるあり。猶^モ以^テ遠^ニと爲^ス。今^ノ人
 を治^ムる人の道^ヲあり。能^ク心^ヲを改^メめ^テ其^ノ理^ヲを委^ニや^クせ^バ

施諸己而不願亦勿施於人

忠恕違道不遠

君子之道四丘未能一焉

施諸己而不願亦勿施於人

忠恕違道不遠

所以父事君

忠恕違道不遠

所以兄事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

所以事長

忠恕違道不遠

右第十三章

右第十三章

君子素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

素其位而行不願乎其外

諸を其身より求む

君子之道辟ひへく遠とほ

きふ行にかゝらず通
 然則さるが如く辟へ高
 たよのちうにうるる乎
 卑き自、まゐる如く
 詩小曰く妻子好合
 瑟琴を鼓ぐ如く兄
 弟既小翁和樂して
 且耽む爾々室家小
 宜一爾が妻孥族
 樂む

子

子^コ曰^{ハク}射^セ有^リ似^ニ乎^カ君^{キミ}子^コ失^ス諸^{モロ}正^シ鵠^{カク}又^{マタ}求^ム

諸其身（二）
 聖人の爲人實み射は君子の徳は似たるものなり
 發ちて的を失はしむる時いたゞの
 己が手前の法のあやむと否と反りて
 むるより正鵠の的の黒よりなり

君子之道辟如行遠必自邇ニ辟如登ルカ

高必自卑スガキニ
 九を徳あるものの底異なることのやうと思へども
 何れもゆるがねてゐる一足あがると歩功を積む
 て徳と成りあつたてゝ遠方に至るも手ずくの通處より始る
 高きふ登るも卑なるもの階梯よりなりするあり

詩曰妻子好合如鼓瑟琴兄弟既翕

和樂且耽ヤ宜爾シ室家カ樂爾ニ妻孥カ

天下を治るも一家の内乃理は、ひと一人は交るも家内相
和むも第一と云ふ夫婦合好く瑟と琴との音の和を接ぶが如
く叔兄弟合好く和らむと樂ハ誠は耽るも家内
妻子和の亦まやも交宜く樂とて道の如くなり

十一

天子富有四海之內宗廟饗之子孫

饗子孫之保

故少人夫大德ハ必

其位を得必其

祿を得必其

得必其壽を得

故少人夫大德ハ必

其位を得必其

祿を得必其

得必其壽を得

詩曰嘉樂の君

子憲憲なる令徳民

小宜一人小耳一祿

在天小受保佑一

之命天自之

申

故少人夫大德ハ必

其位を得必其

祿を得必其

得必其壽を得

詩曰嘉樂の君

子憲憲なる令徳民

小宜一人小耳一祿

在天小受保佑一

之命天自之

申

故少人夫大德ハ必

其位を得必其

祿を得必其

得必其壽を得

詩曰嘉樂の君

保之

帝舜ハ生て福徳ある御方あり誠み大孝ある

人とのへる徳とのへる大聖人あり位といへる上りある天

子と仰ぐせり富ハ則ち四海を保

ト宗廟の意は饗一や子孫永保あり

其位必得其祿必得其名必得其壽

聖人をも尊ぶ帝を賛いある此のどし右の理を以て見ると大

徳の人ハ必て位を得祿を得名を得壽命を得ありと也

故天之生物必因其材而篤焉故栽

者培之傾者覆之

此故天地の間に生る

者此の材質より

詩曰

嘉樂君子憲憲令徳宜民宜人受祿

于天保佑命之自天申之

詩經より云へり

嘉樂ある君子

受あひある天より保ト祐けあひある人の君とみさしめ命つ

あひあるを天より祐を申ね下

故大徳者必受命

かやうの譯ある故大徳ある人ハ必

天道の命ありて大徳を受あひある

右第十七章

子曰無憂者其惟文王乎以王季爲

父以武王爲子父作之子述之

聖人評いある文王と武王と福徳ある御方ハ有と何とある

父君王季御子武王皆大徳の方々あると心あり

御子より廣く徳を述べたもの

武王纘大王

不失天下之顯名尊爲天子富有四

海之内宗廟饗之子孫保之

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

有り富四海之内を

有宗廟之饗子孫

失ハ不尊た天子

賢也旅酬下
所以序齒也
上之爲賤也速也
所以也燕毛
序也所以也

賢也旅酬下爲上所以逮賤也燕毛
所以序齒也

其位を踐其禮を行
ひ其樂を奏其尊
む所を敬其親む

禮奏其樂敬其所尊愛其所親事死
踐其位行其

所を愛死小事を
生小事が如く亡小
事の存小事が如く
孝之至り也

如事生事亡如事存孝之至也

郊社之禮上帝小
事所以也宗廟之
禮其先を祀る所
以也郊社之禮禘嘗
之義を明らふせむ
國を治むる其諸
の掌を示さる如く
乎

郊社之禮所以事上帝也宗廟之禮
所以祀乎其先也明乎郊社之禮禘
嘗之義治國其如示諸掌乎

冬至の日南方郊に於て上天の神明を祭夏至の日北方
の郊に於て后土の祇を祭る也上帝天神也后土其の中
のありき先祖の宗廟を祭る四時也其祭の名を春は杓
とりの夏を祀秋を嘗冬を蒸と名づく又五年小変大
祭あり之を禘と云ふ論語に述るなり右郊社の礼敬禘嘗
の義理を明らふせむ國家を治るにこの心易と誠の掌を
指示せが如くありと云ふ万邦皆上天を戴き是に依て人間
の道立と誠小謹と云ふ知るべし天朝君臣礼義明著なる

右第十九章

哀公政子問子曰文武之政布在方策其人存則其政舉其政息則其政亡

右第十九章

哀公問政子曰文武之政布在方策

其人存則其政舉其人亡則其政息

人道敏政地道敏樹夫政也者

蒲盧也

故為政在人取人以身脩

身以道脩道以仁

仁者人也親親為大義者宜也尊賢

為大親親之殺尊賢之等禮所生也

在下位不獲乎上民不可得而

治矣

故君子不可以不脩身思脩身不可以不事親思事親

不可不知人思知人不可不知天

天下之達道五之

行所以者三曰

君臣也父子也夫

婦也昆弟也朋友之

交也五之者八天下

之達道也知仁勇

三之者天下之達

德也之者行所以

之者一也

或生而知之或

學而知之或困

而知之或利

而行之或勉強

而行之及其成

功一也

子曰好學近乎

知力行近乎

仁知恥近乎

勇

斯三者則知

所以脩身知

所以治人知

所以知人則

知

經典餘而

中備

不可以不知人思知人不可以不知

天上謂之政道取身脩之重也身脩則親事第一

天下之達道五所

以行之者三曰君臣也父子也夫婦

也昆弟也朋友之交也五者天下之

達道也知仁勇三者天下之達德也

所以行之者一也天下通達て人間の道五ツあり夫を行ふの元三ツあり五ツ

或生而知之或學而知之或困而知

之及其知之也或安而行之或利

而行之或勉強而行之及其成功一

也右の達道五人の日用の道なり然ふ此道を或は生るゝや自然と悟知者あり學問して知者あり

子曰好學近乎知力行近乎仁知恥

近乎勇子日の字ハ誤あり始終聖人の語あり九人の病三ツあり先一ツを愚と

知斯三者則知所以脩身知所以脩

身則知所以治人知所以知人則知

知

經典餘而

中備

十一

孟子

卷一

十一

天下國家と治むる
所以を知る

凡そ天下國家と爲
るふ九經有曰く身
を脩む賢を尊
親を親む大臣を敬
を群臣を體を庶民
を子とて百工を來
を遠人を柔り諸
侯を懷く

身を脩むれば則ち道
立賢を尊べば則ち
惑ハ不親を親めば
則ち諸父昆弟怨と
不大臣を敬ふと
則ち眩ハ不羣臣を

報禮重し庶民を子
とて柔れば則ち百姓
勸む百工を來せば
則ち財用足遠人
を柔れば則ち四方
之小歸を諸侯を懷
くれば則ち天下之
畏る

齊明盛服禮ふ非
ハ動く不身を脩む
所以也讒を去色を
遠ざけ貨を賤く而
て徳を貴むハ賢
を勸る所以也其位
を尊ふ其祿を重

所以治天下國家矣

右三ツの近とあり其理
を知ハ則身を脩る所以

を知るにあり以下上乃

凡爲天下國家有九

經曰脩身也尊賢也親親也敬大臣

也體羣臣也子庶民也來百工也柔

遠人也懷諸侯也

天下を爲るに經常定まりし
道九あり其ヶ條一ツあり吾

身を脩るニツハ賢徳を尊む三ツハ父母の二方ハ孝
を盡し親類を親む四ツハ大臣を敬せしむる一ツハ五ツ

の君羣の臣下を手足體の如く六ツハ庶の民ハ我子の
如く七ツハ百の諸職工の者新集りて有べくハめる

遠方の人も徳ふるの柔むる九ハ修身則道立

尊賢則不惑親親則諸父昆弟不怨

敬大臣則不眩體羣臣則士之報禮

重子庶民則百姓勸來百工則財用

足柔遠人則四方歸之懷諸侯則天

下畏之

身を脩むれば己の道立る賢徳を尊む
は理の惑ハ不親むべき方我親ミ

睦なれハ諸父昆弟あひふ縁類の怨む大臣敬せし
むハ國家の政務暗くさる眩む君羣の臣下と手足

の如くさる時々各々君の恩義を重むる事一あり
庶の民を子の如く恵む百姓を服して農業を

勸むる百の職工來りて集りあはば用事足りて財宝通
用するを遠方の人來るを四方の人帰服する見ハ諸侯

を能く撫懷時ハ齊明盛服非禮不動所以脩

身也去讒遠色賤貨而貴徳所以勸

賢也尊其位重其祿同其好惡所以
勸親親也官盛任使所以勸大臣也

其好惡を同ふ
 親を親を動かす
 所以也官盛不任使
 也忠信祿を重んず
 土を動かす所以也時
 子使を動かす所以也
 省を動かす所以也日
 事小細首を動かす所
 以也往を送り來を
 迎へ善を嘉し不能
 を矜を遠人を柔く
 所以也絶世を繼廢
 國を奉亂を治め危
 危を持朝聘時を以

忠信重祿所以勸士也時使薄歛所
 以勸百姓也日省月試既稟稱事所
 以勸百工也送往迎來嘉善而矜不
 能所以柔遠人也繼絶世舉廢國治
 亂持危朝聘以時厚往而薄來所以
 懷諸侯也

常不安が
 らぬ身を脩る
 を賤して賢徳を貴し
 中ハ其位を尊く
 是親を尊く
 致し遣はし時ハ士たる者カを盡し
 人夫を便税歛を薄するハ百姓業を勸る

て往々厚く來る
 又薄く諸侯を懷
 所以也
 凡天下國家を爲す
 九經有之を行ふ
 所以の者一也

行之者一也
 立不豫則廢言前定則不跲事前定
 則不困行前定則不疚道前定則不
 窮

凡そ事豫めざる
 不バ則ち立豫めざる
 不バ則ち廢る言前
 不バ則ち困る行前
 不バ則ち不道前不
 定は則ち窮不

窮
 立不豫則廢言前定則不跲事前定
 則不困行前定則不疚道前定則不
 窮
 在下位不獲乎上

誠まことハ天てん之道のち也なり之のを
誠まことニする者ものハ人ひと之の

学まなぶび弗なと有あ之のを学まな
 で能あたせ弗なハ措あ弗な問と
 弗なと有あ之のを問とて知し
 弗なハ措あ弗な思おもハ弗なと
 有あ之のを思おもて得え弗なハ
 措あ弗な辨わ弗なと有あ之のを
 辨わへん明あらうせ弗な
 措あ弗な行おハ弗なと
 有あ之のを行おふと篤あく
 せ弗なハ措あ弗な人ひと一ひと

七

誠と謂ふ天の道あり天道の誠ふ叶ふ心ハ人の道あり誠の道
 厚た時ハ心ふ勉を思ハなして自然ハ道ふ叶ふて成得
 我身從容ハ道ハ中ハ聖人の徳多ク求め誠の場ハ至る
 一の道ハ中善と成擇ミ行ふと厚く之を執する者あり

之ヲ博ハク學ガク以テ事ヲ知ル審シらるふハ問トて感カをミるハ慎シて思ハふハと
 バ深コ切カあらうハ明アカらうハ辨ハとス心ヲ易カくハ篤ツクくハ行ハくハ仁ニをミるハと
 有リ弗レ學ブ學ス之ヲ弗レ能ク弗レ措セ也カ有リ弗レ問フ問ス
 之ヲ弗レ知ラ弗レ措ム也カ有リ弗レ思フ思フ之ヲ弗レ得ズ弗レ
 措ム也カ有リ弗レ辨ズ辨ズ之ヲ弗レ明カ弗レ措ム也カ有リ弗レ
 行ハ行ハ之ヲ弗レ篤ク弗レ措ム也カ人ハ一ヒ能ク之ヲ己レ百ヒ
 之ヲ人ハ十ヒ能ク之ヲ己レ千ヒ之ヲ

果して此道を能く
ハ愚ありと雖ども
必だ明く又柔あり
りと雖ども必だ強

誠まこと自みづか明あきら々々有あるる之の疾やみ
性せいと謂い明あきら々々有あるる自みづか
誠まこと々々有あるる之のを教しと謂い
誠まこと々々有あるるバ則すなはち明あきら々々有あるる
明あきら々々有あるる是こゝにバ則すなはち

ち誠あり
右第二十一章子思上章夫子天道人道之意を承て而して言を立る也此自以下十二章皆子思之言なり以て反覆して此章之意を推明す

人^{ひと}は^は者^{もの}乎^やと^との^の事^{こと}あり^{あり}と^とバ^バ致^{いた}方^{かた}なり^{なり}最^{さい}又^{また}学^{がく}ぶ^ぶと^となり^{なり}
 能^よ問^と盡^{ことごと}たま^{たま}を^をち^ちは^は措^そ弗^ふ問^と尋^{たず}る^る事^{こと}を^を好^{この}ま^まざ^ざる^る
 り^りは^は致^{いた}方^{かた}なり^{なり}言^{こと}又^{また}問^とや^やと^とあり^{あり}バ^バ審^{しん}ら^らう^う知^し盡^{ことごと}さ^さざ^ざ
 一^{ひと}の^の捨^{すて}措^そ弗^ふ思^{おも}ひ^ひ成^{なり}あ^ある^るさ^さる^るの^のハ^ハ致^{いた}方^{かた}なり^{なり}最^{さい}
 思^{おも}ふ^ふと^とあり^{あり}バ^バ眞^{まこと}と^とく^くその^{その}深^{ふか}さを^を得^える^るま^まど^どハ^ハ措^そ弗^ふ行^{こう}バ^バ
 行^{こう}バ^バ以^{もつ}下^{した}皆^{みな}此^{この}例^{れい}あり^{あり}辨^わと^とた^たハ^ハ明^{あきら}う^うふ^ふあり^{あり}ま^まを^を措^そ弗^ふ行^{こう}バ^バ
 篤^{あつ}く^く實^{じつ}ある^るま^まど^どハ^ハ措^そ弗^ふと^とあり^{あり}右^{みぎ}の^のと^とく^く君^{くん}子^しハ^ハ德^{とく}は^は
 進^{すす}と^と勤^{きん}と^との^のま^まに^にバ^バ事^{こと}斯^{かく}の^の如^{ごと}く^くの^の人^{ひと}の^の器^き量^{りやう}ハ^ハ依^よて^て他^た
 人^{ひと}ハ^ハ一^{ひと}度^{たび}も^も能^よ覚^さゆ^ゆま^まバ^バ己^{おのれ}が^が身^みハ^ハ百^{ひゃく}と^とび^びあ^ある^る之^{これ}を^を遂^{とぎ}
 り^り他^た人^{ひと}が^が十^{じゅう}と^とび^びあ^ある^るハ^ハ己^{おのれ}が^が千^{せん}と^とび^びあ^ある^る能^よは^はと^とい^いふ^ふ人^{ひと}あり^{あり}

自誠明謂之性自明誠謂之教誠則明矣明則誠矣

道人道之意而立言也自此以下十
二章皆子思之言以及覆推明此章

之意ラ 右ミに聖人天人の意を説く人を承け教の語を立たてり以下に子思の言あり丁寧ニ

反覆かく其
意を推明らむ

唯天下至誠爲能盡其性能盡其性則
能盡人之性能盡人之性則能盡物之
性能盡物之性則可以贊天地之化育
可以贊天地之化育則可以與天地參

能物之性を盡す則ち天地之化育を賛可以て天地の化育を賛可へ則ち以て天地與參するべし

右第二十二章

其次ハ曲を致す曲すは能誠有誠るは則ち著一著ハ則ち明く明くは則ち動く動くは則ち變化する唯天下至誠能化

右第二十三章

至誠之道以前知未可國家將興有と將必禎祥有國家將亡びんと將必妖孽有焉龜見は四體ふ動く禍福將至らんと將善必先之を知不善必先之を知故ハ人ハ至誠神の如し

矣天地の徳ハ万物を恵ミ養フ能ハる化育あり天地の性ハ誠の至りあり天地ハ等ハる徳を聖人ハ天下の誠の至り能ハる天地の性を盡行あり且常人の性ハ本來生るなりと聖人ハ等ハる性を備へ来る然レども欲とハ私ハ穢さる聖人ハ徳を推及シ人ハ性を天理の正ハるなりと盡行ハる其ハ物ハ生ハる育テ養フ兎角ハ天地の化育を賛ハる誠ハ聖人の徳とハ天地人の參ト唱ふるあり

右第二十二章

其次致曲曲能有誠誠則形形則著著則明明則動動則變變則化唯天下至誠爲能化

右聖人の次ある徳ハ人ハ示スレ如クと説キ其譯ハ夫賢人君子ハ曲を致スレハ人ハ仁義を備ヘ生る孟子の書ハ述レ通りあり其心の發スル處ハ或ハ仁ハ義ハ付テ出スレハ一事ハ推廣スレ誠ハ其の誠積ハ形ハ著ハる行ハ明ハ其光明動ク其明ハる徳動ハ廣ハる後他のものも變化スレ成ルハ至リ大ニ徳を有ク遂ニ天地聖人の場ニ至ル右形見至物ハ變ズルハ化スレハ至ルあり

右第二十三章

至誠之道可以前知國家將興必有禎祥國家將亡必有妖孽見乎蓍龜動乎四體禍福將至善必先知之不善必先知之故至誠如神

然レ誠あることハ外ハ顯ハる積リク事ハ自然ト人ハ其端顯ハるなり起メ依テ何事モ手前より其善惡吉凶知ラるあり假令ハ國ハ家めくも繁昌ハるハ興んと將トハ禎祥ト

右第二十四章

誠者自來成道自
道也

誠者物之終始誠
不物無是故
君子誠之貴
為誠者自來成
己非物成所
以也己成仁也
物成知也性之
德也內外合之
道也故君子時
小之宜也措也

をあらう 衰亡ひんとするところの妖華を見まわす 著電
処ゆも見へ又ハ立居るもの四體ゆも動くところ禍福
善不善とも先立ち知るを以て
誠の至りハ神明の如くといふ

右第二十四章

誠者自成也而道自道也

誠者物之終始不誠無
物是故君子誠之為貴

非自成己而已也所以成物也成己
仁也成物知也性之德也合内外之

道也故時措之宜也

道也故時措之宜也

右第二十五章

故君子至誠無
息

右第二十五章

故至誠無息

不息則久久則徵徵則
悠遠悠遠則博厚博厚則高明

悠遠悠遠則博厚博厚則高明

其誠の徳の息こそあが故み常み久きあり爰を以て
其徴外み突いて何となく測るるなりハ靈妙の窮り

博厚ハ物を載る所
以也高明ハ物を覆
ふ所以也悠久ハ物
を成所以也

博厚ハ地ハ配を高
明ハ天ハ配を悠久
ハ疆無

此の如き者見さ不
一の章る動う不
て變を爲と無て
成る

天地之道一言小
て而一ハ盡可也其
物爲貳多不則ち
其物を生ぶと測
ら不

天地之道ハ博一厚
一高一明一あり悠
一久

今夫天ハ斯昭昭之
多きあり其光輝あり
無ふ及んで日月星
辰焉に繫萬物焉に
覆今夫地ハ一撮土之
多きあり其廣厚小
及んで華嶽を載て

博厚所以載物也高明所以
覆物也悠久所以成物也

博厚配地高明配天悠久無疆

博厚ハ地ハ配を高
明ハ天ハ配を悠久
ハ疆無

爲而成
如此者不見而章不動而變無

天地之道可一言而盡也其爲物不
貳則其生物不測

悠也久也
及其無窮也日月星辰繫焉萬物覆

焉今夫地一撮土之多及其廣厚載
華嶽而不重振河海而不洩萬物載

焉今夫山一卷石之多及其廣大艸
木生之禽獸居之寶藏興焉今夫水

及んで華嶽を載て

及んで華嶽を載て

重一とせ不河海を
振るて洩さす萬物
焉に載今夫山ハ一
卷石之多さる其
廣大ふ及んで草木
之生禽獸之小
居寶藏焉に興今夫
水ハ一句之多さる
其測ふ及んで
鼉龍魚鼈焉に
生ト貨財焉に殖す
詩云維天之命
於穆とて已不
蓋天之天爲所以
曰於顯あらず不
文王之德之純
蓋文王之文爲所以
純とて亦已不

右第二十六章

大哉聖人之道洋洋
乎とて萬物を発
育峻天小極

優優とて大なる
哉禮儀三百威儀三
千

其人待而後
小行

故曰人小曰苟
至徳あり不バ至道
凝不

一勺之多及其不測鼉龍魚鼈

生焉貨財殖焉此段ハ右天理貳あり盛ん大
あるに至りてハ物を生じて殖る

をのべり夫天ハ僅の清く昭昭ののり積つるの窮
あるふ及ぶのあり多々たるあり日月星辰繋
り照らして物を生じて覆ふとあり地とあり本一掃ある
土あり多々たるふ及んで廣く厚くして華山泰嶽と
の大山をも載て動一とせ河海を振て洩さす萬物とあり
上ふ載るあり山といふと同一理あり一卷の石あり廣大なるふ
至りてハ草木草生茂り禽獸珠玉金銀の藏めとあり
めく是より興るさる海江湖も一勺の水より測まぬありハ
鼉龍魚鼈龍魚鼈と生じていづくの
貨財物も殖とふ及ぶ

詩云維天之命於穆不已蓋曰天之
所以爲天也於乎不顯文王之德之
純蓋曰文王之所以爲文也純亦不

己天道の命ハハ於まてこい穆々として已とありと
あり穆とていづるもよく恐るるもよく自らあり万代
の末までも化育の徳の己とありとあり且文王の徳の純る其
光りも亦顯るに叶ふべからず是文王の徳を比して稱のあり

右第二十六章

大哉聖人之道洋洋乎發育萬物峻

極于天聖人の徳限りあるて峻とて天小極と
いふべく万物を育て恵て發達せしむることの
洋洋乎

優優大哉禮儀三百威儀三千

待其その徳の優々て大なる事なる人ハ世界の立つてあり
上乃天神地祇先ふ天子より下ハ万民まで日用万
物に至るまで禮儀あるを以て其大なる禮儀と
いふも三百ヶ条威儀三千ヶ条と云々

人而後行右の礼義ハ其徳よりて盛衰あり人
人を待て後世にむかうあり

故曰苟不至徳至道不凝焉苟ハ至徳
人ありてハた

故君子尊德性而道問學致廣大而盡精微極高明而道中庸溫故而知新敦厚以崇禮

是故君子居而後言動而後起足以及人而後求諸人

此謂與

右第二十七章

子曰：「愚而好自用，賤而好自專，生乎今之世，反古之道，如此者，我及其身。」

經典餘而

故君子尊德性而道問學

致廣大而盡精微極高明而道中庸

溫故而知新敦厚以崇禮

是故居上不驕為下不倍國

有道其言足以興國無道其默足以容

詩曰既明且哲以保其身其此之謂與

子曰：「愚而好自用，賤而好自專，生乎今之世，反古之道，如此者，我及其身。」

不議禮不制度不考文

今天下車軌書同文行同倫

右第二十七章

子曰：「愚而好自用，賤而好自專，生乎今之世，反古之道，如此者，我及其身。」

不議禮不制度不考文

今天下車軌書同文行同倫

禮之上下尊卑親

疏之相親交之法

王乃書籍有以上天子非也

今之世也天下統於一

文也而天下統於一

中庸

廿七

其位有と雖も苟
も其德無れば敢
て禮樂を作らむ其
德有と雖も苟も
其位無れば敢て禮
樂を作らむ

子曰ハク吾夏の禮
を説キ杞徵する小
足不吾殷の禮を學
宋存する有吾周の
禮を學ふ今之を用
吾ハ周小從ハん
右第二十八章

天下小王する小三
重あり其過ち寡
い

上ある者善と雖も
徵無し徵無し信し
不信し不バ民從ハ
弗下ある者善と
雖も尊と不尊と
不バ信し不バ民從
不バ民從ハ弗
故ゆふ君子之道
諸を身小本つけ諸
を庶民小徵し諸を
三王小考て而して
繆さし不諸を天地
小建而して悖ら不
諸を鬼神小質を而
て聖人を俟て而して

雖有其位苟無其德不敢作禮
樂焉雖有其德苟無其位亦不敢作
禮樂焉

子曰吾説夏禮杞不足徵也
吾學殷禮有宋存焉吾學周禮今用
之吾從周

右第二十八章

王天下有三重焉其寡過矣乎

天下の王とあるは三つの重なることあり即ち右の禮度
文あり之を行ハ政務のの風俗と一様あり人々
過ちあり
上焉者雖善無徵無徵不信不
信民弗從下者焉雖善不尊不尊不
信不信民弗從

人而不惑

夏殷周三聖人のみされたり
三と建てり德ふ劣るく悖

惑ハ不
諸を鬼神しんの質しつを而を
也も百世ひやくせい以もつて聖人せいじんを
俟まちて而しかて惑まどハ不なハ
人ひとをし知し也なり

是故ゆゑ君子くんしハ動うごて世よ
天下てんかの道みちと爲なる行なふ
て世よ天下てんかの法はふと爲なる
言いて世よ天下てんかの則すなはちと
爲なる遠とほくれば則すなはち望のぞみ
むと有あ之の近ぢかきれば
則すなはち厭いとハ不な

詩し曰いく彼かれは在ある
惡あくむ無なし此こに在ある射や
無な幾いくハ夙ふく夜や以もつて
永とこく譽うたを終はつと君きみ
子こ未なく此この如ごとき
一ひとく登のぼ天下てんかハ譽うた有あ
者もの有あ未なく

未二度ふたたびハ

右第二十九章

仲尼ちゅうに祖述そしつ堯舜ぎょうしん祖述そしつ
文武ぶんぶを憲章けんしやうす上うへ天てん
の時ときハ律りつり下した水みづ土つち
の襲おそ辟へいハ天地てんち之の
持も載のせ不なし無な覆ふく幬し
せ不なし無な如ごとき辟へい
ハ四時しじ之の錯さく行かうの
如ごとき日月にげつ之の代しろ明めいの
如ごとき
萬物ばんぶつ並ならび育そだて相あ害がい

經典餘師

聖人せいじんハ其その道みちハ符合ふごふ一ひとく疑ぎひる一ひとく百世ひやくせいを經へて
質しつ諸鬼神しよくわん而を無な疑ぎ知し天てん也なり百世ひやくせい以もつて俟まち

聖人せいじん而を不な惑まど知し人ひと也なり
經へて惑まどハ人ひとをし知し也なり
道みちをし知しと云い者もの也なり

是故ゆゑ君子くんしハ動うごて世よ
道みちをし知しと云い者もの也なり

道行みちかう而を世よ爲なる天下てんか法はふ言いて世よ爲なる天下てんか
則すなはち遠とほ之の則すなはち有あ望のぞ近ぢか之の則すなはち不な厭いと

詩曰しいう在ある彼かれは無な惡あく在ある此こに無な射や
此こに在ある彼かれは無な惡あく在ある此こに無な射や

庶幾しよいく夙夜ふくや以もつて永終とこしほ譽うた君子くんし未なく不な如ごとき
此こに在ある彼かれは無な惡あく在ある此こに無な射や

此而こゝ蚤はや有あ譽うた於を天下てんか者もの也なり
此こに在ある彼かれは無な惡あく在ある此こに無な射や

右第二十九章
仲尼ちゅうに祖述そしつ堯舜ぎょうしん祖述そしつ
文武ぶんぶを憲章けんしやうす上うへ天てん
の時ときハ律りつり下した水みづ土つち
の襲おそ辟へいハ天地てんち之の
持も載のせ不なし無な覆ふく幬し
せ不なし無な如ごとき辟へい
ハ四時しじ之の錯さく行かうの
如ごとき日月にげつ之の代しろ明めいの
如ごとき

不覆幬ふくし辟へい如ごとき四時しじ之の錯さく行かう如ごとき日月にげつ之の
代しろ明めいの如ごとき

代明だいめい聖人せいじんハ其その道みちハ符合ふごふ一ひとく疑ぎひる一ひとく百世ひやくせいを經へて
質しつ諸鬼神しよくわん而を無な疑ぎ知し天てん也なり百世ひやくせい以もつて俟まち

萬物並育而不相害ばんぶつならびにあひがひをな道並行みちならびに
萬物並育而不相害ばんぶつならびにあひがひをな道並行みちならびに

害不道並行ハ
相悖ラ不徳
川流大徳敦化
此天地之大を爲所
以也

右第三十章

唯天下至誠能聰明睿
知足以臨之有以
足寬裕溫柔中て以て
容る有以足發強剛
毅足以執之有以
足齊莊中正足以
敬之有以足文理密察
足以別之有以足爲
博淵泉也

博淵泉也
博ハ天の如ク淵
泉ハ淵の如ク見
て而て民敬せ不
ト莫言て而て民
信ぜ不ト莫行て而
て民説び不ト莫

是を以て聲名中國
小洋溢施及蠻貊
及舟車至る所人
力通る所天之覆
ふ所地之載る所日
月照る所霜露降る
所凡そ血氣有者尊
親せ不ト莫故曰
配天

五由余而

而不相悖小徳川流大徳敦化此天
地之所以爲大也

誠ニ物を育て敦く化さるものあり天地の造化ハ
息々たるものとみえ川の流るごとく行はる

右第三十章

唯天下至聖爲能聰明睿知足以有
臨也寬裕溫柔足以有容也發強剛
毅足以有執也齊莊中正足以有敬
也文理密察足以有別也

博淵泉而
博ハ天の如ク淵
泉ハ淵の如ク見
て而て民敬せ不
ト莫言て而て民
信ぜ不ト莫行て而
て民説び不ト莫

時出之
博淵泉如淵見而民莫不敬
言而民莫不信行而民莫不説

是以聲名洋溢乎中國施及蠻貊舟
車所至人力所通天之所覆地之所
載日月所照霜露所降凡有血氣者

莫不尊親故曰配天

中庸

十八

詩云く爾の室又在
を相あひあひ尚はなくハ屋漏
小愧こけい不故ふこがゆへ小
君子くんしハ動うごく不まして敬りやう
一言不ひとことして信しんむ

詩云スく奏スと假カり
て言フと無ク時ヲ争ハひ
有ルと靡スと是レ故ニ君
子ノ賞ヲと不レレノ民ヲ勸ム
む怒ルと不レレノ民ヲ鉄ス
鉞ヲ威スる

詩云曰く顕はと不
んや惟徳百辟其之
刑是故小君
子篤恭以天下
平

三十一

詩云。潛雖伏矣。亦孔之昭。故君子內省。不疚。無惡於志。君子之所不可及者。其唯人之所不見乎。

どもかへりて昭々あると孔一と詩經ふえり徳ある人
 とへ他の儀なり只心の内は省て疾病とありむ此故ふ
 志ふもなむ無むとありとあり君子の行は清くみ心を
 用ゐるとの深くしに其徳の及ぶるをいへりのは尤も
 人の見聞ざる所はあり人の直は見聞所をつと
 ちて大抵名聞のなり致せりありとや

詩云相

而敬不言而信ス屋漏スとく室のの西南の隅にて身を清坐する所にて常にみあらず

とくあはれい入あつ詩の心を漸がつふ屋漏み在于と
ううひ相ふ身の挙動は愧きとくうとく入心あり君
子ハ身動されども敬をあふー口み
言されどもたぐひの信あり

詩曰奏假無

言時靡有爭是故君子不賞而民勸
不怒而民威於鈇鉞

の妙徳あるを賦一たる詩あり君子の神明ありてハ
言ふのありとなく誠を以て神明奏假ありての如き徳あ
る故に人とよく化して争となく人て靡となり徳ある人ハ
詩の如く君の人を化あるも賞さざども民勸さる怒ま
ず民威ると鉄鉞よりも甚し鉄鉞ハ人を刑の如きなり
不顯の妙徳といふところ下みあるも此例みあるべきなり
神明交とてハ別み説あり○天朝の法ハことと同一
きみ似て一格過尚所以ありと知るなり

詩曰不顯惟德百辟其刑之是故君
子篤恭而天下平
不顯の妙徳ハ人々之四
方ニ及ス事廣大ニモ

何の顯不んや誠は惟徳顯るべし心あり百辟も
万邦の君あり各徳を化して之を刑とし人ありあり
故に君子ハ誠の有り内み篤くして心あり迄
恭々しく高く南面して社天下平なり

詩云予明德未大聲以色子曰聲
懷入聲と色以を大
みせ不子曰ハく聲
色之以て民を化ま
るみ於る未也詩み
曰く徳の輶き毛の
如く毛猶倫有上天
之載ハ聲無臭無
至ま

詩云予懷明德未大聲以色子曰聲
色之於以化民末也詩曰徳輶如毛
毛猶有倫上天之載無聲無臭至矣
此詩の心ハ文王の明德を懷み内み積てと聲みあり
ハ顔色もあふと心あり聖人評論したまふ
万民を化まるみ於る聲色みあふと人ハ大徳を
評するみあり未さうまといふも大徳を評する
み詩みりる明德の微み歟あるとその輕きと毛の
一とゆり然ととも是も毛と人ハ猶形ありて倫
ありとを君大徳をりるみか詩みりる上天の徳
をのべし社ありたり夫天徳の大み至るなりハ言ハ
述べく大なりとくさうくさうくさうくさうくさうく
み一とありの言社不顯の徳乃大なるを評するみハ

右第三十三章

子思前章極致之言
小因反て其本を
求め復下學已う
爲み獨を謹
む之事自推て而
して之を言て以て
篤恭して天下平
なる之盛なる
み馴致し又其妙
を賛して聲無臭
無み至て而
後み已蓋し一篇
之要を舉て而
て約して之を言

誠み至矣盡ま
とみ可あり

右第三十三章子思因前章極致
之言反求其本復自下學爲己謹
獨之事推而言之以馴致乎篤恭
而天下平之盛又贊其妙至於無
聲無臭而後已焉蓋舉一篇之要
而約言之其反復丁寧示人之意
至深切矣學者其可不盡心乎

子思前み謂る廣大を致高明を極とみ言み因
其本を求め下より學で上み達を已り爲め獨を
謹より篤恭の場へ馴致とあり其妙聲色み
至りて説已るあり是一篇の肝要を言あり實み

其反復丁寧人子
示之之意至深切
多學者其心を盡
さ不可らん乎

中庸章句畢

深切に反復丁寧人子
意を尊ふべし又深く心を盡すべしとあり

中庸章句畢

